

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団  
2016年度(前期)一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

テーマ

「看護学生の特別支援学校在校生に対するボランティア活動での役割と課題」

申請者：増田由美  
所属機関：四日市看護医療大学 看護学部  
提出年月日：2017年8月21日

## 【研究成果】

### 1. 研究の目的

この研究に先がけ、研究者らが A 看護大学障害児ボランティアサークルの学生（以後、学生とする）を対象に行った調査では、学生は子どもの成長や社会性を広げ、保護者に寄り添い、学生同士で学びを共有し関係性を深める役割を担っていた。また、活動から喜びを得て今後積極的・自主的に活動へ参加していくことを課題としていた（増田, 別所 2017）。そこで今回ボランティア活動の受け手となる B 特別支援学校の教員（以後、教員）や保護者が捉えた活動の現状を把握し、そこから受け手のニーズや課題を明らかにすることを本研究の目的とした。

### 2. 研究の対象者

A 看護大学障害児ボランティアサークルは、主に B 特別支援学校（肢体不自由部門、以後、B 校とする）行事の応援、A 大学祭へ子どもを招待する通年行事の他、個別訪問など不定期に行う活動を行っている。本研究の対象者は、学生が活動する行事等に参加した経験があり、研究承諾の得られた保護者と教員である。本来であれば、学生が直接関わる B 校の児童・生徒が対象として相応しいが、障害により調査協力が難しいことを考え、共に参加した保護者と教員を対象者とした。

### 3. 研究の方法

#### 1) 研究デザイン

グループインタビュー法による質的記述的研究法を用いた。

#### 2) データの収集方法

行事等の終了後対象者の希望する場所を選び、学生との交流の内容と感想、学生への要望や期待、望ましいと考える関わりなどをインタビューガイドに沿って複数のグループにインタビューを行った。内容は、対象者の同意の上 IC レコーダーに録音した。参加者相互の自由な意見が語られるようリラックスできる環境に配慮し 1 グループに対し 20～30 分程度を目安とした。参加者の属性として、子どもの学年と関係、参加者の年代、ボランティアとの交流回数を調査した。

#### 3) 調査期間

平成 28 年 8 月～12 月であった。

#### 4) 分析方法

内容はグループ毎に文章化し研究者間で精読し、意味あるまとまりを抽出、各グループの代表者である教員 1 名に確認を受けた。その後、内容の類似したもので集めてカテゴリー化を行い、研究メンバー間で解釈の不一致はないか検討した。

#### 5) 倫理的配慮

対象者には研究の目的と方法、参加は自由意思であり不参加による不利益はないこと、

インタビュー参加者の個人は特定されないこと、結果は目的以外に使用しないこと、学会等での結果公表予定、データにはパスワードをかけ研究者のみが閲覧できるようにし、鍵のかかる場所で一定期間保存後、シュレadder処理することなどを文書と口頭で説明した。所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。なお、当研究に関する利益相反はない。

#### 4. 結果

##### 1) 対象の背景

B校における夏休みの地区行事に参加した4グループ30名(平均7.5名)、A大学祭に参加した2名の合計32名の同意を得た。内訳は保護者13名(母親12名、父親1名)、教員19名であった。インタビュー所要時間は20分～30分(平均25.8分)であり、子どもの学年(教員は主担当学年)、対象者の年代、学生との交流回数は表参照。

表 対象者の属性

		N=32		
		保護者数	教員数	%
項目		13	19	
子どもの学年	1～2年生	0	2	6
	3～4年生	1	1	6
	5～6年生	2	3	15.6
	中学部	6	7	40.6
	高等部	4	5	28.1
	不明	0	1	3.1
対象者の年代	20代	0	5	15.6
	30代	3	6	28.1
	40代	9	4	40.6
	50代	1	4	15.6
ボランティアとの 交流回数	初めて	5	6	34.3
	2回	3	2	15.6
	3～5回	4	7	34.3
	6回～	1	4	15.6

##### 2) 分析結果

看護学生のボランティア活動の受け手となる教員や保護者が捉えた活動の現状とニーズや課題として、【子どもの安心と安全】、【子どもの社会性の広がり】、【学生への親しみと感謝】、【学生の成長への期待と応援】、【子どもへの理解で深まるふれあい】の5

つのカテゴリーが抽出された。本文中の【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、《》はコード、結果内の「」は語りの一部を示す。

### (1) 【子どもの安心と安全】

子どもとの交流の場面で必要とされる環境の条件として安心・安全な環境が抽出された。活動は、看護学生であっても教員や保護者の同伴のもとでのみ子どもを抱き、車いす介助を行っている。対象が子どもであること、様々な障害をもっていることから、「子どもたちの安心・安全を最優先し、学生ができることを任せた」という子どもの安心と安全の確保への要望が教員からみられた。

### (2) 【子どもの社会性の広がり】

子どもとの交流において期待されることとして、〈子どもの対人関係の広がり〉と〈友だちとしてのふれあい〉の2つのサブカテゴリーが抽出された。

#### ① 〈子どもの対人関係の広がり〉

日常的に存在する親や教員以外の学生を目の前にし、「子どもにはどうしたら初対面の人に遊んでもらえるかを考える良い機会となり良い刺激となる」と、教員は《教員や親以外の学生と触れ合うことに価値》を感じていた。また、保護者は「学生の声かけに子どもの方からコミュニケーションを取ろうとした姿に歓び」を感じ、「親ではなく、年代が近い学生には気持ちの表出ができると確認」して、《子どもから学生に心を開こうとする》様子から、教員・保護者共に《子どもの対人関係が広がるよい機会》であると捉えていた。

#### ② 〈友だちとしてのふれあい〉

「間近に親や教員がいなくとも、子どもは終始笑顔と豊かな表情」で過ごし《子どもは笑顔で楽しんだ》と保護者の感想が述べられた。また今回の調査での子どもの学年は学生と年齢の近い中高生が7割近くを占めており、「共通の話題での意思疎通がみられ」、「体で楽しむ子ども」を保護者は見て《同世代ならではの子どもの楽しみ》と捉え、《親はふれあいを支援したい》と考えていた。そして教員は、限られた家庭や学校から《人間関係の広がりを求める子どもの存在》を感じ、《子どもも学生も共に楽しむ》様子から、学生に《引っ込み思案の子どもへ声かけを期待》し、今後に向けて《友だち関係への発展を期待》していた。

### (3) 【学生への親しみと感謝】

学生への感想や印象として、〈学生への好感・親近感〉と〈学生への感謝〉の2つのサブカテゴリーが抽出された。

#### ① 〈学生への好感・親近感〉

「以前関わりのある学生を子どもは覚えていて親も安心した」ことや、「親も顔なじみ」になっていたことで、「自分の子どもには関わってほしいと思う」と《親も親近感をもてる学生》と捉えていた。また、教員は「学生は準備段階から自主的に手伝い積極的」であり、「学びたいとの姿勢を感じる」と語り、《積極的な学生》が存在すると感じ

ていた。「子どもに自分の言葉で声かけてもらい嬉しかった」保護者や、「子どもを緊張させないように絶えず笑顔で接していた」、「子どもに寄り添う姿勢がよかった」と感じた教員は、学生の態度を《好感を持てる子どもとの関わり方》と捉えていた。

#### ② 〈学生への感謝〉

「遊びたい時期にボランティアに時間を費やす本物さ」や「参加してもらっただけで感謝の気持ち」など子どもの行事に対して保護者は《学生の参加への感謝》の気持ちを抱いていた。そして、車いすや荷物で手いっぱいになり閉まる扉を遮ることができない時、「学生の添えた手でエレベーターが安全に乗降できる嬉しさ」との《学生の気遣いへの感謝》を、教員はボランティアの力で「行事がスムーズに運営できる」という学生の若いエネルギーに期待する《学生の行動力への感謝》を抱いていた。

### (4) 【学生の成長への期待と応援】

子どもと関わることで学生が成長することにつながる〈学生の学びの機会〉、〈消極的な学生とその克服への期待〉、〈看護を目指す者への期待〉と、受け入れる側としての〈準備や体制を整える必要性〉の4つのサブカテゴリーが抽出された。

#### ① 〈学生の学びの機会〉

子どもとの言語的コミュニケーションが困難であると、「どうすれば関われるか、といろいろな角度から見て考える」と保護者は《学生も子どもを多角的に見て関わり方を知るよい機会》と考えていた。また、教員は「学生の時に地域の障害児や多くの人と関わる体験は重要」と、保護者は「参加してよかったと学生の身になる機会を提供したい」など、《学生が主体的に学べ収穫のある機会としたい》という、学生が満足感を得て主体的な学びの機会となることが望まれた。

#### ② 〈消極的な学生とその克服への期待〉

教員は、経験が乏しい下級生の中に《関わり方がわからず積極的になれない学生の存在》を感じ、《慣れない学生には学生間のサポートが必要》で《何度も関わることで向上する積極性と関係性》から《失敗を恐れない積極性を期待》していた。

#### ③ 〈看護を目指す者への期待〉

障害のある子どもの中には医療に関わる機会が多い場合があり、保護者は《障害児に理解ある看護師を期待》し、教員もまた「多くの人に支えられながら人は生活している、子どもを取り巻く環境や状況の実際を知ることは看護に必要」と《看護師をめざす学生に大切な体験》として将来を期待していた。

#### ④ 〈準備や体制を整える必要性〉

教員は、《学生の活動目標を支援》したり、「関わり方がわからず戸惑う学生に助言することで、積極的になった」との経験から《戸惑う学生には助言が必要》と考えていた。また、「教員多忙のため業務的な活動内容になってしまう B 校学校祭への反省」や、保護者と教員共に「事前の打ち合わせや子どもと接する時間を作れば活動も充実できる」

との意見から、《ボランティア受け入れ体制にも課題がある》と、〈準備や体制を整える必要性〉を感じていた。

#### (5) 【子どもへの理解で深まるふれあい】

一人ひとりの子どもを尊重してふれあう機会を重ねることで、学生の子どもへの理解が深まることから、〈平等なふれあい〉、〈一人の子どもという視点〉、〈ふれあう機会や内容の工夫〉、〈継続活動で深まる理解〉という4つのサブカテゴリーが抽出された。

##### ① 〈平等なふれあい〉

教員は限りある時間や人数の中でも、学生が子どもに対し担当制をとるなど、どの子どもとも平等に関わりをもち、心を通わせ合うことを期待していた。

##### ② 〈一人の子どもという視点〉

障害がある子どもと学生の交流活動ではあるが、障害のあるなしに関わらず一人の子どもであるという視点での関わりが保護者から求められた。

##### ③ 〈ふれあう機会や内容の工夫〉

行事等によっては、教員は「子どもの方から積極的に向かい合っていくべき」という《子どもの参加回数を増やす工夫が必要》であり、そのためには時には学校活動の枠を超えて《家族の理解と協力の周知》が必要と考えていた。また、「行事等当日1回切りの関わりだけでは教員も配慮が行き届かず残念」な思いから《その場の関わりだけでは限界がある》ため、「他の機会にも訪問し子どもを知ってほしい」との意見がみられた。一方、「行事内でボランティア主催のコーナーがあってもいい」と《学生主催の行事等も歓迎》しており、保護者は《子どもが協力できる機会も希望》し、子どもと学生がふれあう機会の充実やその内容に工夫が求められた。

##### ④ 〈継続活動で深まる理解〉

行事等へ学生が単発的に参加するだけでは、活動内容が業務の補助となることも致し方ない。しかし、「継続した活動から生まれる子どもたちへの愛着」であり、「愛着があればたくさんのが自然発生する」ことで、子どもへの理解が深まり、ふれあいに繋がるとの意見が教員からみられた。

## 5. 考察

### 1) 安心・安全のもとで子どもの社会性の広がりを期待

今回の対象は、夏の地区行事と大学祭の参加者であり、非日常的な行事での学生との交流が中心であった。いつもと違う環境での行事では、子どもは緊張や興奮することもあり、さらに介助が必要であったり体調の変化を来しやすい障害のある子どもの場合、まず子どもの安心や安全を考慮し確保すべきと考える。また、「普段限られた人間関係で生活している子どもたちにとって、若い学生と触れ合う機会は貴重であった」（文部科学省，2007）とあるように、医療的ケアが必要であったり障害のため移動に介助を必要とする子どもは自らの意志で自由に活動範囲を広げることが困難となる。そのた

め、家族や学校内のつながり以外に対人関係を構築する機会が豊富とはいえ、学童期の課題である特定の友人や仲間との関係から社会性を発展させていくことが容易ではない。また、軽度知的障害児を含む発達障害特性を有する児童の友人関係認識の研究（遠矢，岩男，大戸，2012）によれば、子どもたちは何らかの活動を共にするより深い情緒的な相互理解を友だちに求めているという。学生は重度重複障害のある子どもとも交流しており、言語的コミュニケーションが難しくても普段子どもがみせない表情や笑顔、学生も子どもと一緒に楽しむ姿から、両者の間に一時的であれ心が通う友だちとしてのふれあいが存在したと考える。

## 2) 学生の成長への期待

学生の態度と子どもの反応から、学生に対し好感や親近感、感謝の気持ちを抱く一方、学生にとっても体験から得られる良い学びの機会として、保護者や教員から成長を期待されていた。看護大学生はボランティア活動での学びや困難さ、活動課題に対し自己評価することで自己教育力を育成できる（榎本，池田，2010）との報告がある。先行して行った学生へのアンケート結果では積極的・主体的参加を自己課題と捉えており（増田，別所，2017）、今回の調査では課題達成のための具体策ともいえる意見が期待や応援の形で多く挙げられていた。さらに、ふれあいがないとわからない子どもと家族や支える教員が織りなす地域での生活は、看護職をめざす者として人への理解を深めることにつながると、学生の成長を促す協力を惜しまない姿勢も浮き彫りになった。ボランティア活動の相互性とは多様な価値観をもった人とのふれあいが人の成長にとって欠くことのできないものだが障害者とふれあえるきっかけ作りは簡単ではない（石田，1999）。しかし、今回の調査で学生の成長を育む豊かな人的環境での活動の現状が明らかになり、福祉サービスの受け手側は単なる客体ではなく福祉という営みの一翼を担う社会活動を行う人というように（木原，2002）、まさに学生はボランティア活動の受け手でもあると考える。

## 3) ふれあいを深めることで広がる関係性

ボランティア体験によって看護学生は障害者への否定的イメージを減少させ障害のない人と変わらないという肯定的理解を示す（岩田，2001）というように、経験の浅い学生は戸惑いながら子どもと交流をはじめ、同世代ならではの共感や周囲の支援を得てふれあえる関係性を作っていた。しかし、今回の調査では活動する学生に対し、障害の有無以前にひとりの子どもとしての視点をもってほしいとの希望があった。これは、親は子どもの様子を通して自分自身の感覚をもつ（上原，奈良間，2016）ことから、一人の人としての親自身の希望であるとも考えられ、その気持ちの存在の重みを受け止めて活動をすべきことが求められた。そして、学生の子どもの理解が進めば子どもも学生を理解するという相互性が豊かに育つように、行事等の枠にはまった活動だけでなく、互いの主体性を重んじたふれあいを保護者や教員の理解と協力のバックアップのもとで続けていく必要性が示唆された。

## 6. 結論

A 大学障害児ボランティアサークルの活動において、B 特別支援学校の障害児の保護者と教員が捉えた現状とニーズ、課題は以下のようであった。

- 1) 安心・安全のもとで学生とのふれあいを通じ子どもの社会性の広がりを期待していた。
- 2) 学生に対し好感・親近感を抱き、活動を通して学生の成長を応援したいと考えていることから、学生はボランティアの担い手であると同時に受け手であった。
- 3) 子どもの社会性の広がりや学生の成長はふれあいが深まることで進展するため、相互が主体的、継続的に活動していくことが課題とされた。

## 7. 研究の限界と課題

本研究は 1 看護大学におけるボランティアサークルの学生と 1 特別支援学校の保護者と教員を対象にしているため、解釈に限りがある。しかし、地域に根差した実践活動の充実への示唆を得たため、学生の課題や役割との接点を探り具体策を立案し実施に取り組んでいきたい。

## 8. 研究を終えて

学生は日頃、子どもたちとのボランティア活動でのふれあいをとても楽しそうに行っており、子どもたちからも輝く笑顔を返してもらうことは多い。しかし、この感覚に委ねるだけの活動では自己満足に過ぎないのではないのか、次も今まで通りでよいのかという疑問があった。果たして、学生や子どもたち、保護者や教員の方々はどのような期待や思いを学生ボランティアに抱いているのだろうか、生の声からの分析の必要性を感じていた。障害児の保護者は多忙な生活を送っており、なかなか調査に協力をいただくことは難しいが、今回このような機会を得て実現できたことをひとつでも今後の活動につなげ、わずかながらではあるが、地域の社会貢献に寄与できればこの上ない幸せである。

本研究は、2016 年度度勇美財団在宅医療研究による助成を受けたものです。研究にご協力いただきました保護者、教員、学生のみなさま、そして財団のご理解に心より感謝申し上げます。

## 文献

石田易司 (1999). II ボランティア活動—国内編 3.障害者とボランティア. 内海成治, 入江幸男, 水野義之編, ボランティア学を学ぶ人のために (pp.131-145). 世界思想社.

- 岩田みどり(2001) . ボランティア体験による障害児・者に対する学生の態度・認識への影響に関する研究. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 14, 73-78.
- 木原孝久 (2002). 第 3 章「助けられ」の心理. 木原孝久著, 福祉の人間学入門 (pp.106-139). 本の泉社.
- 増田由美, 別所史子 (2017). 看護学生の特別支援学校在校生に対するボランティア活動での役割と課題—学生へのアンケート調査より—. 四日市看護医療大学紀要, 10(1), 39-45.
- 榊本朋子, 池田敏子 (2010). 看護大学生のボランティア活動における自己教育力に関わる学習成果—教育的支援であるグループワークでの発言内容の分析—. 日本看護教育学会誌, 20(1), 1-13.
- 文部科学省, 初等中等教育局特別支援教育課 (2007). 特別支援教育関係ボランティア活用事例集. 2017年3月20日アクセス, [www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/012.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/012.htm)
- 遠矢浩一, 岩男英美, 大戸彩音 (2012). 発達障害特性を有する児童の友人関係認識と行動特徴の関係性—友人関係尺度, WISC-III, CBCL の分析を通して—. リハビリテーション心理学研究, 38(2), 1-13.
- 上原章枝, 奈良間美保(2016). 医療的ケアを必要とする子どもの親の体験—親であることや自分自身を感じること—. 日本小児看護学会誌, 25(1), 43-50.